

協働イベントをやってみよう パート1

「協働イベント」の意義と実践のためのノウハウ

2011年度 第1回 2011年10月18日(火)

講師: 森村 ゆき 一般社団法人PARACUP 代表理事

【学習目標】

- ・複数の団体が協力して行うイベントの意義と、実践のためのノウハウを学ぶ。
- ・参加者で「共に何ができるか」を考え、参加者が出したアイデアの中から、共同実施可能な案を策定し、実践に向けて計画を練る。

協働の利点

「PARACUP～世界の子どもたちに贈るRUN～」は世界の子どもたちを支援することを目的としたチャリティ・マラソン大会。一般社団法人PARACUP(パラカップ)と複数のNGO団体の共催で大会を運営し、その収益金を参加団体に配分して、世界の子どもたちを支援している。

PARACUPを含め、共催団体は専従スタッフのいない団体がほとんど。当初1団体で始めたが、2006年には共催団体が7団体に増えた。だが翌年(2007年)に、団体数が3団体と減ったため、原因を考えたとき、役割分担があいまいであったことに気が付いた。共催団体間の役割分担を明確にして、2009年からは共催団体向けの説明会を催した結果、共催団体数が増え、2011年度の共催団体数は12団体になった。

1 団体だけでは協賛企業の募集、資金調達に限界があ

り、世間への影響力も弱く、集客力も限界があると感じた。イベントの運営だけでなく支援先団体の情報把握も必要であったため、他団体と協力しようという流れになった。

他団体と協働を始めると、ボランティアスタッフが増え、各団体のノウハウを学びあうことができ、刺激になった。そして、「世界の子どもたち」という広いビジョンを全面に出すことで広く受け入れられやすくなった。協賛企業にイベントの趣旨を理解されやすくなり、メディアから取材を受けるようになった。集客力も増え、世間への影響力も増したと感じている。**当初の収益は100万円だったが、7回目の今年は1,000万円以上に増えた。**

PARACUP開催がきっかけとなり、団体間での交流会や勉強会、別のイベントの開催、新たな団体の発足など、情報交換や刺激を受ける場が広がっている。

運営の留意点

運営の中心となる「事務局員」の選出、会議の進め方、収益配分、大会中止の際のリスクの取り方など、ルールを決めて運営している。事務局員は毎年20～25人ぐらいおり、会議ではなかなか意見がまとまらないので、事前に議題を出してもらっている。

収益は、共催団体の貢献度に応じて配分している。役割に応じてカテゴリ分けし、「事務局カテゴリは△万円」などと配分額を決めている。また、ランナーや当日ボランティアが参加申込みをする際に紹介団体を記入してもらい、その数も配分の基準とし、自分の団体の会員の参加や協賛企業の紹介も推奨している。

質問はメーリングリストを通じて行うなど、情報共有に活用している。なかには押しが強い人もいるので、情報はなるべく皆で共有し、協調してもらうようにしている。



講義の後、グループに分かれて、具体的なイベントの実践案を話し合った

協働団体の選び方

協働する団体を選ぶ基準としては、①ビジョンや問題意識が近い、②価値観を共有できる、の2点。「一緒にやっていきたい」と感じあえることが重要で、互いを尊敬し、苦楽を共にしてくれる団体がよい。資金面だけのメリットを感じて参加すると運営面で苦労する。初めての団体には試用期間を設け、その期間を経て本格的に参入してもらう。

協働する前に、各団体にどのようなメリットがあるのか考える必

要がある。各団体が必ずやらなくてはならないことは何かを明確化することが重要。大きな団体から配分金額が採算に合わないと思われたことがある。私たちの場合、専従スタッフがおらず活動が小規模な団体のほうが、ニーズが合うし相性もよい。

協働イベントをするためにはコミュニケーション能力が高い人、ほかの団体の貢献も見ながら参加できる人、学ぶ姿勢がある人が必要であると感じている。

質疑応答



【参加者】 PARACUPの準備期間は？

【森 村】 4月開催の大会の場合は半年間。

【参加者】 運営参加者の平均年齢は？

【森 村】 学生から30代前後まで。30代後半だと理事のような役割。もっと若い層を入れたいと考えている。

【参加者】 森村さんからはどのようにボランティアに助言・指導されているか。

【森 村】 ボランティアのリーダーは翌年もやってくれるのでノウハウが蓄積され、ほかの人たちに継承されていく。意志疎通のため年に2回合宿を行うほか、毎週月曜の定例ミーティングにリーダーが出席し、分会のミーティングも週1回出ている。

【参加者】 PARACUPが終わった後の活動は？

【森 村】 多くの方が準備期間の6カ月間で燃え尽きてしまう。イベント終了後に反省会をして解散し、それから約2カ月後に報告会で収益報告を行い、全業務を終了している。収益の計算は最終的には会計士にお願いしている。収益は事務局経費（会議室代やサイトの更新）がかかるので200～300万円くらい残し、残りはすべて寄付する。あらかじめ寄付の事務局経費への充当基準を提示している。

【参加者】 参加団体のメリットは、資金を得るほかに知名度を上げることもあるだろう。

【森 村】 ある団体では大会にブースを出したことで、1年間で得た会員数と同じくらいの会員を1日で獲得した例もある。

【参加者の意見交換（抜粋）】

参加者がグループに分かれて、感想と参加者のできる具体的な協働イベント案を話し合った。

グループ1: お金を出してまで参加する人がいる、というのが新しい発想。こういうイベントでは準備段階から共有時間が長く意義深い。PARACUPは、誰でも参加でき、参加した皆さんに利益が分配される仕組みがあることがよい。このような協働イベントができればよい。

グループ2: 具体的な協働イベント・事業案として、①スタンプラリー、②スカイプを通じて英語を学ぶ機会を提供する、③在日フィリピン人によるイベントに参加する、etc.

グループ3: 具体的な協働イベント案として、フィリピンでチャリティ・マラソンをやる。